

憲法9条と私 17



高めたい平和への意識

廣田 憲威

「めざして」に原稿を書くのは何年ぶりだろうか。この度、編集部からの依頼があり、「憲法9条と私」を書くことになった。普段、民医連の会議や集会などでは、しきりに日本国憲法の重要性を説き、世界に誇るべき9条と25条を守ろうと言っている割には、自分自身のこととして憲法問題を考える場合、意外と考えていないことに気がつかされる。読者の意に沿わないかもしれないが、思うがままに書いてみたい。

私は生まれも育ちも大阪である。大阪は、沖縄や横須賀と同じように大きな港があるが、幸いなことに戦時中も軍港が設置されたことはなかった。そのこともあり戦後も比較的大きな規模の米軍や自衛隊の基地はない。逆にこのことは大阪人にとって、安全保障や戦争の問題から意識が希薄になってはいないかと改めて自戒するのである。

こういう私でも、戦争の恐ろしさを間近で体験したことがある。別に戦場や紛争地域に直接赴いたわけではないが、今から30年以上前に高校を卒業した頃の頃に初めて沖縄を旅行した際、大阪からの船が沖縄港に入港する時に見た光景に衝撃を受けた。それは、沖縄の岸壁に無造作に放置された無数の米軍の上陸艇の姿であった。これがベトナム戦争の記録映画で見たものかと思ったものであり、実物そのものはかなり錆びが出ていたものの、実戦で使用されたものの重みというか、恐ろしさは今でも鮮明に覚えている。

それから20年以上も経ってから初めてベトナムに行った際、クチのトンネルとハノイの戦争証跡博物館を訪問する機会を得た。クチのトンネル（ベトナム軍が米軍の攻撃から守るために地下に張り巡らしたトンネル）に入った時に、こんな所で長期間にもわたって少ない武器で米軍と戦っていたのかと思うと、別の意味で沖縄のひめゆり壕を超えるインパクトを受けた。また、ハノイの戦争証跡博物館で感心したのは、統一後のベトナム政府が、ベトナム戦争にかかわったカメラマンやジャーナリストをくまなく紹介していたことだ。それも米軍に従軍している人も含めてである。その趣旨は、どちら側の立場であっても、ベトナム戦争の実際や悲惨さを世界に配信したということで、報道関係者とりわけ戦争カメラマンの活動を賞賛していた。インターネットが発達した今日では、湾岸戦争以降の戦争や紛争は、お茶の間ライブで見ることができ、見る側の感覚も麻痺しているのではないだろうか。また、日常的に戦争や紛争がない国だからこそ、簡単に世界中の情報が共有できるのではないだろうか。これがもし、日本が戦争状態や内紛状態にあり、一般市民も銃弾に怯えながら生活していたならば、隣国でどのような事が起こっているかが、第一義的な関心事とはなりえないだろう。どのような形であれ、ベトナムで起こっている事態を世界に配信されたことに政府として敬意を表していることに感心をさせられた。

これらの事をいろいろ考えると、改めて憲法9条で守られた国に生活していることのありが

たさを感じることに、意識的に平和を意識できる取り組みに参加しなければ、本当の「平和ボケ」になってしまわないかということである。

最近、沖縄での米兵による少女暴行事件、千葉沖での自衛艦による漁船沈没事件など、起こってはならない事件・事故が多発している。もし、わが国に憲法9条がなく、軍事国家であるとしたら、とくに千葉沖の事件などでは、漁師は被害者ではなく自衛艦の進行を妨害したとして加害者にされかねない。さらに、あらゆる空港や港は軍事優先となり安心して旅行もできなくなるであろう。そんな世の中には絶対にしてはいけないと思う。しかし、憲法改悪などの動きが深く静かに進行しており、「平和ボケ」のまましていると、ある日突然、恐ろしい事態になることも想定される。そのようなことをさせないためにも、憲法9条や平和の問題を常に自らの問題として考え、実践することを心がけたい今日この頃である。

(ひろた・のりたけ 全日本民主医療機関連合会)